

加賀千代女「吉崎紀行」の

足跡を追って

皆 森 禮 子

平成十年は蓮如が明応八年（一四九九）三月死亡して、五百年になる。吉崎御坊（福井県金津町吉崎）では、五百年忌が催された。毎年旧暦三月二十二、三日に蓮如忌は行われて来たが、五木寛之氏の小説『蓮如』もあってか、この年はことのほか参詣人が多くにぎわった。

加賀の俳人「千代女」も晩年六十歳、宝暦十一年（一七六一）三月二十二、三日の蓮如忌に詣でている。千代女の生誕地、松任（石川県松任市）を出発し、手取川を渡り、小松の俳友たちを訪ねて一泊し、十万石前田支藩大聖寺を通り、吉崎御坊で蓮如像を拝み

うつむいた所が台やすみれ草

千代

との句を詠み、足をのばして山代温泉で一泊して松任に帰りついている。

このときの吟行集「吉崎紀行」が、金沢市立図書館にある。

吉 崎 紀 行

やよひのはつかあまりよし崎まふてせむと、旅たちけるに、折から風はけしく、ことに福島とやらん松原を越、やうやくと小松何かしのやとに吹きこまれて

いふことも羽てと、のふこてふ哉

明れハ今江のかたはらにして、あふち庵のぬしに逢、蜆取の句をかたり給ふを聞、我も唯にやみかたくして



『俳諧百人一首』より

水鏡見るそたちなし蜆取

大しう寺素夫のぬしを問いまいらせて

かおる風おくにひかえて松の花

笠取山

かさ通りの山や笑ひもとかしき

橘の茶屋

四季色々殊更春のうへ木茶屋

竹の浦

なかき日も目に暮る也竹のうら

けふといふけふはしめてよし崎まふてける。その嬉

しさ有りかたさのあまり、まつ御場よりはいたて

まつりて

うつむいた所か台やすみれ草

加真

鶯のとちらか鳴そ水の影

汐越を見やりて

しほ越の松や小蝶は中もとり

友にいさなはれて山代の薬師堂にまふて

おのづから手も地につくや糸さくら

とし頃のねかひたりぬとおかて杖を返しぬ

尼 素園

素園尼のよし崎詣てをむかえて

鶯を見上る枝のまはゆさよ 斧仙

うくひすやはてなき空のおもひ哉 千代尼

(昭和乙亥捨歳無射 中本惣堂)

(金沢市立図書館所蔵)

千代女は「朝顔やつるべとられてもらひ水」が代表句であり、女流俳人として有名で、生誕地松任市は市制二十周年には千代女の生涯をテーマにした宝生流新作能「加賀の千代女―朝顔」を上演するなどして、全国に千代女のふるさと松任を印象づけている。

千代女は元禄十六年(一七〇三)に金沢市の近郊、松任八日市に父表具師福増屋六兵衛の長女として生まれる。母は福増屋の向い側にあった村井屋小兵衛の二女つるである。幼い頃、父の仕事場にかけてあった山水画や書の筆跡を見て育ったせいか、六歳のときに、

たの庭にこもん花咲くみにこんか 千代

七歳のとき

初雁やそのあとからもあとからも
の句を詠んだといわれている。

十二歳のころ、本吉(石川県石川郡美川町)にあった北角屋の主人、岸弥左衛門(俳号、半睡はんすいのち大睡だいすい)に弟子入りして、俳諧の手ほどきを受ける。十五歳のころから加賀、

能登、越中で俳諧の女流として名を高めはじめていた。

十八歳で金沢大衆免大組 福岡作八に嫁ぎ、二十歳のとき夫に先立たれて実家にもどり、その後、再嫁せず俳諧に生涯をかけた。俳諧は支考に学び、のち乙由に入門、また麦水むぎみづ、既白きぱく、蘭更らんこうなどと共に希因きいんを中心とする蕉風復興に俳才を発揮した。

千代女の住んだ松任は百万石の城下町金沢から東北約三里(十二キロ)ほどに位置し、古くから商工の町で藩制時代町奉行が置かれ、北陸街道に沿う宿駅であったので旅人の往来がはげしかった。そのため北陸に杖をひく俳人たちとの交渉が古くからあったと思われる。

各地の俳人が加賀の国を訪ねると必ずといっていいほど松任の千代女を訪ねた。希因、山隣、舎架しゃかをはじめ数多くの人があり、なかでも女流俳人、柴仙女、珈原かへらと交流し、近所に住んでいた相河屋之甫あいはやのふ・すへ女夫妻とは終生交際が続いた。

当時の千代女は天津の智月尼(一六三三頃―一七一八)、伊勢の園女おのゝ(一六六四―一七二六)、丹波の捨女すてゝめ(一六三三―一六九八)、江戸の秋色女あきいろめ(一六六九―一七二五)とともに「元禄五俳女」と云われていた。

千代女は訪れる人々と交わるだけでなく、各地を旅している。享保十年(一七二五)夫の三回忌を迎えて、京都の

東本願寺詣り、伊勢山田に住む麦林舎乙由を訪ねている。

元文三年(一七三八)には珈原と共に、京都に上り浪花から舞子にまで遊び、宝暦四年(一七五四)には奥の細道のあとを慕って、陸奥より白河の関を越えて江戸まで足をのばしている。

宝暦十年(一七六〇)五十八歳のときには三月に金沢の東本願寺に詣り、九月二十一日から八日間、越中井波御坊に、祖師親鸞(二七三―三六三)五百回忌法会に詣り、その途中、津幡の俳人、見風宅に立寄っている。

翌十一年(一七六一)三月十八日から十日間行われた、京都の東本願寺の大法要には、珈原尼(当時六十六歳)と同道の旅をしている。その後も同十二年(一七六二)六十歳のとき、吉崎御坊の蓮如忌に詣りて「吉崎紀行」を遺す。千代女は号をちよ、千代、千代女、千代尼、尼千代、素園、素園尼、尼素園、千代尼素園、尼そえん、などと云った。

剃髪は宝暦四年(一七五四)五十二歳の冬で、尼の姿となり、号を素園とした。このときの句
髪を結う手の隙あけとこたつかな 素園
がある。

千代女と同じく、松任町の中町に住んだ相河屋之甫、すへ女夫妻は、彼女の晩年に、病気の折に影のように寄り添っ

て、終生敬慕し、親しく交わって死ぬまで見守った。

千代女は安永四年（一七七五）七十三歳で亡くなった。

九月八日辞世の句は

月も見て我はこの夜をかしく哉

である。

千代女の研究家は数多く、本も沢山出版され、外国でも翻訳され読まれていて、私など書くこともない。

北陸は昔から浄土真宗王国であり、私は幼い頃から隣近所の人々が「蓮如さん、蓮如さん」と、吉崎御坊へのお詣りに行く姿を見て育った。千代女も熱心な信者で吉崎詣でをしたと知って、平成十年蓮如忌の五百年忌で、これも縁と蓮如忌に合わせて、千代女の住んでいた松任町の聖興寺から、越前の吉崎御坊へと、旧北陸道を「吉崎紀行」をたよりに千代女の足跡をたどり歩いた。

千代女は浄土真宗の熱心な信者で特に蓮如の教えに傾倒していたので、吉崎御坊の蓮如忌に詣でたいと思っていた様子で、

弥生のはつかあまり吉崎詣でせむと旅たちけると、はげしい雨の中を旅立っている。

千代女の住んだ松任は北陸街道に沿う宿場駅でもあったので旅人の往来がはげしく、杖を引く人々も多かったとい

い道を千代女も通ったであろうと、気をよくして歩を進めた。

この旅は千代女が六十歳で、小松に麦水が金沢の四楽庵（宝暦十一年六月から十三年春まで）を甥に譲って、樗庵を構えた、この庵を千代女が訪ねたものだろうと、千代女の研究者中本恕堂氏が書いている。

樗庵は今江渚近くで九龍橋の辺りにあった。というので川を探す。田畑の広がる加賀平野は白山が美しく、日本海も眺められた風景だったろうが、いまは街の真中である。街道筋には明治のはじめ頃までは、路端によしなど囲った茶屋が並んでいたという。高堂の町並を抜けて梯川をみつめた。

梯川は江戸時代の初期には舟渡しだったが、寛永十七年（一六四〇）加賀三代藩主前田利常公の小松入城後は堅固な橋が架けられた。その後は水害などで幾度も流され、架けなおされて現在の梯川橋となった。橋のたもとに神社があり、古地図の「天神」と符合した。

小松天満宮だ。樹々が夜来の雨に洗われて美しい。前田利常公が小松城に隠居しているとき、前田氏の氏神である北野天神を城北に当たるこの地に社殿を造営して鎮祭した。東に白山を望み、西に安宅の海岸、梯川のそばである。

前田家の庇護のもと当時の多くは多くの善男善女の参詣人が

う。現在も松任市八日市町は松任の中心商店街であり、通りの中程の左側に「加賀の千代尼宅跡」と碑が建って、「千代尼通り」と云われ、更に二百メートル程進むと右側に聖興寺がある。

門をくぐり境内に入ると、辞世の句「月も見て我はこの世をかしかな」の彫られた塚、寛政十一年（一七九九）建立と、千代尼堂（草風庵）が建っている。金沢市の念西寺にも千代尼の三十七回忌、文化八年（一八一）に建てられたという「朝顔やつるべとられてもらひ水」の句碑がある。

金沢から小松までの古地図を片手に、聖興寺から歩きはじめ。松任から南に旧北陸街道を進むと、荒屋、柏野、下柏野の街道沿いの町並に、妻入りの農家風の古い構えの家がときどき見え、創業二百五十年余の円八のあんころの店があつて松任の町外れとなる。

源兵嶋、水嶋と過ぎ、白山のふもとを源とする手取川が、昔はあばれ川と云われた川もいまは静かな流れになっていて、川を渡ると粟生の渡船跡がある福島のは、街道筋に松並木が多かったというが今は少ない。

間もなく、能美郡根上町となる、この地名の松は西南の砂丘にあった。「根上りの松」、この松の近くの砂丘を木曾街道と呼び、義仲が平家を追撃した古い道という。この古

あつたろう。留守がちの小松城代に代って通行手形の発行もしたという。利常公自らお手植えの松もあつたというがわからない。

十二代藩主斉泰公の御守殿偕子の方が滞在されて、文久三年（一八六三）十一月十八日に茶会も献上されたという。昔はさぞにぎわっただろうと思うが、境内に人影はない。松原を越えて、小松の宿に風吹き込まれてたどりつき、一夜をあかしたという千代女。麦水の樗庵はこのあたりだったろうと、思いつつ橋を渡る。

水鏡見るそたちなし蜺取

千代

右手に見える筈の今江渚もいまは埋めたてられている。蜺も取れたというが……と、梯川をのぞきこむが水の流れも少なく、魚の姿さえ見えぬ。現在の小松は南北におよそ二キロ、ところどころに残る古い家並、旧城下町の面影をしのびながら進む。

加賀藩と大聖寺藩との境にあつた串茶屋、街道沿いで、一里塚のそばの一軒の休茶屋で女たちが旅人の接待をしたのが始まりで、最盛期には十四軒にもなったという。いまは街道筋の家並にせらしき面影など見られないが、街道から入ったところの共同墓地に遊女たちの墓が残されている。

千代女の頃にはどうだったろうかと思いつつ、動橋に入

る。動橋は宿場町で江戸中期には戸数九十三戸あり、街道筋には十村役をつとめた問屋、橋本酒造店がある。母屋は間口八間ほどで、平屋建ての田舎風の造りであるが広い庭をもち屋敷は大きい。

更に脚をのばして、十万石前田支藩であった大聖寺に入る。大聖寺では笠取山の近くにあった無菊庵に素夫を訪ねている。

大しよう寺素夫のぬしを問ひまいらせて

かほる風おくにひかえて松の花

笠取山

かさのりの山や笑ひもとかしき

無菊庵は笠取山の近くにあったというが、明治のはじめに山の中腹を横切つて新道ができて小山となつて、間近に眺められた日本海もいまは望めない。庵では斧仙らとも逢い、合流している。

嵩を見上る枝のまばゆさよ

斧仙

の句がある。

庵を出て日本海を右手にしつつ、歩を進めて橋の茶屋のあたりというが、昭和二十三年（一九四八）の福井地震で町の様子が変わり、住宅街つづきで、街の真中あたりに松の木を植えた家が二、三あって、わずかに街道筋だとわかる。

橋の茶屋

と詠み、

芭蕉は

越前の境、吉崎の入江に船に棹さして汐越の松を訪ぬ。
終宵風（よもがら）に波をはこばせて月にたれたる汐越の松

西行

この一首にて数景つきたり、もし一辨加えるものは無用の指を立るがごとしと『奥の細道』に記している。この歌は西行作となつてゐるが蓮如の作ともいう。しほ越の松は現在は芦原ゴルフクラブの内にあって外部からは見ることが出来ない。

また、この松は大聖寺川河口の吉崎の入江を西に渡ると村はずれが荒磯となつており、岩と岩との割れ目から松が生えていて、地元の漁師たちが沖に漁に出て、帰路に向かうときの目印にもなつてゐた。北前船の全盛期には灯台の代りにもなつたという。

千代女のめざした吉崎御坊は福井県と石川県の県境の町である。吉崎御坊の後身、西東の別院は福井県の金津町に属する。

あこがれの蓮如忌に詣でて詠んだ句は

うつむいた所か台やすみれ草

千代

でいまは蓮如上人銅像からお花松へ至る遊歩道沿いの石碑に刻まれている。

四季色々殊更春のうへ木茶屋

橋は北陸街道の加賀の国、最後の宿場である。江戸後期には「橋茶屋」と呼ばれ、粽（ちまき）を名物にした茶屋があった。

その一軒、銭亀屋のあとに「橋の宿跡」の石碑があった。一里塚跡を過ぎると道は狭くなり、国境の丘陵にむかつてのびている。吉崎に入る手前の街道に竹藪が多く、竹の浦という景勝の地だったという。その名残るか家並の間にわずかばかりの竹藪が見えた。

竹の浦

ながき日も目に暮る也竹のうら

道ばたの小さな草花が、春の遅い北国にも春を感じさせ、旅人をなぐさめてくれる。いまもこれには変わらない。

右手に北潟湖を望みながら、越前の最北の宿、細呂木へ。細呂木は吉崎御坊への道の分岐点でもある。北陸街道を右手に曲がって私は吉崎御坊へと向つた。

蓮如忌の催される加賀の里には汐越の松があり、北潟湖を控えた絶景で『奥の細道』にも書かれている。その頃には、十貫の松、根上りの松、やりかけの松、駒つなぎ松、腰かけ松、みだれ松、はらみ松、おとこ松……など、名前の付いたみごとな松が並び、眼下に日本海が広がっていた。

千代女は

しほ越の松や小蝶は中もとり

蓮如忌は蓮如の没後、翌、明応九年（一五〇〇）から吉崎で今日まで毎年蓮如忌が催され、現在の御下向上洛の形は、本願時十世真如上人の時代、享保六年（一七二一）八月二十八日に惣道場願慶寺より本山へ上納された御影が翌七年より、年一度里帰りということが始まった。

道中七日間の旅は京都市中から近江湖西を通り、途中八十二か所に立ち寄つての行程となり、四月二十三日夕刻、御影像を乗せた御輿が細呂木街道口に達し、お迎えに集つた人々は高張提灯をしたで、ホズキ提灯を手にしてお迎えする。御影像は本尊の左にかけられ、僧侶、参詣者が心一つにして正信偈の大合唱が行われる。

蓮如が三井寺寺内の近松より越前の吉崎に移つたのは、文明三年（一四七一）五十七歳のときで、三井寺の保護のもとでは自由な伝導ができなかったためという。蓮如が建てた吉崎御坊は、福井県の金津西の北端、北潟湖畔の吉崎山にある。

旧跡は「お山」と呼ばれ、東西の別院があり、湖水に近い方が本願寺派西別院で、延享二年（一七四五）の建立、大谷派東の建立はその翌年で、肉附の面、嫁おどしの伝説が有名で、願慶寺と吉崎寺にそれぞれ残っている。

お山には高村光雲作の蓮如像が立ち、松林の中の遊歩道をぬつて、上人御腰掛石、お手植のお花松にまじつて、礎

石のいくつかが残っている。このお山に千代女の句碑もある。この年は蓮如没後五百年忌ということで、いつもの年よりことの外にぎわっていた。

吉崎の蓮如忌は弥生下五日の中に、二、三日前から執行されたこと、中本恕堂氏が書かれ、千代女は何日滞在したかははっきりしないが、詣でたのち素夫たちとつれだつて山代温泉に向かっている。

千代女は念願だった吉崎詣を終え、北陸街道に出て動橋に戻り、旧山代街道に入り山代温泉に行つたであろうと、その道を歩いた。

山代温泉は山を背にした江沼平野にある。庶民的な湯の町で、行基が一羽のガラスが湯に傷を癒しているのを見つけて、人にやさしい湯だと開いた千三百年の歴史をもつ温泉である。総湯のあたりに紅ガラ格子戸の昔ながらの構えの家がわずかに残る。

千代女は総湯のそばの真言宗の寺、薬師堂に詣り、

おのつから手も地につくや糸さくら

と詠んでいる。念願の吉崎詣りを終えたこと、ここで杖を返している。

江戸時代から近郊近在の町人や農民の休養の地にぎわつた山代温泉は、石川県の南端に位置し、美しい自然にめぐまれ、歌人と謝野晶子が愛し、美食家の魯山人もあそんだ

という温泉で、いまでも多くの人々に親しまれている。

千代女の住んだ松任から吉崎御坊―山代温泉までは、十二里（四十八キロ）余りの道程である。金沢から小松までの古地図と、旧北陸街道の地図を参考に、千代女の吉崎紀行の足跡を追った。地図通りに寺院や神社、河川があり、いにしえの人々も同じ道を歩いたと千代女を身近に感じた旅であつた。

参考文献

- | | | |
|----------------------|----------|-------|
| 中本恕堂著『加賀の千代女全集』 | 北国出版社 | 一九五五年 |
| 長谷川かな女著『加賀の千代』 | 育英出版 | 一九四三年 |
| 牧考治著『北陸石俳書探訪』 | 北国出版社 | 一九七九年 |
| 竹谷政雄著『俳諧百一集』 | 石川図書館協会 | 一九六九年 |
| 石川県教員委員会編『北陸道（北国街道）』 | | |
| 辻川達雄著『蓮如』 | 石川県教育委員会 | 一九九四年 |
| 和田重厚著『蓮如伝説への旅』 | 本願寺維持財団 | 一九九三年 |
| | | 一九九五年 |

〒一五二一〇〇三一

東京都目黒区中根二一五―六―五〇四

TEL 〇三―三七―一八―三三二五

後藤逸女の形見「都鳥」と

小山田家おんな三代の記

大井 多津子

「都鳥」と小山田家について

待望の近世女性双書第一巻『藻塩草』が桂文庫から発売された。

秋田の歌人後藤逸女の史料集である。これには歌集の『藻塩草』・「酉とし詠藻」・「以津和歌集」・倭文「花月帖」・女訓書「嫁のつとめ」・随筆・沼田香雪への文・逸女が書写した大小吟・恩師へ宛てた文などの原文とその翻刻などが掲載されている。また逸女については、著者の高橋伝一郎氏が詳細に考察している。更に逸女史料の背景として遺墨などのほか、逸女が友人たちと交流した書簡集がある。その中に「都鳥にみる安政大地震」という一項目がたてられている。以下本文を引用する。

「都鳥」とは逸女が弟子小山田イヨに与えた書簡文集の書名である。「都鳥」は一九九六年小山田イヨの後裔金良武氏により提供された逸女の新資料で、殆ど江戸からの

書簡を中心に編集されているところから都鳥と名付けられたものであろうか」

東京桂の会主宰者柴桂子の紹介で「都鳥」の所有者、金良武氏にお目にかかりその原本を拝見、お話を伺うことができた。その折りに小山田イヨの歌集「落穂集」も拝見させていただいた。「都鳥」の原本は筆づかい、筆の緩急、濃淡など素晴らしく、匂うような絵のような文字で、原本に接する喜びをしみじみと感じさせるものだった。

内容は前述の通り書簡を集めたもので、差出人の名は伏せられているが、江戸若松町に住む歌友と思われる。折々に江戸の消息などを知らせたものであるが、中でも安政二（一八五五）年十月二日の大地震に自らも被災し、その有様を綴った文章がなまなましく惨状を伝えていて資料的にも貴重なものである。逸女はこれを「都鳥」と名づけて弟子の小山田イヨに与えている。

この「都鳥」は金良武氏の曾祖母に当たるイヨ 祖母ミヨ、母ヨシエそして良武氏と受けつがれたものである。良武氏はイヨについて次のように語っている。

「曾祖母イヨについてはくわしいことはわからないが、秋田県南秋田郡豊河村山田に天保三年（一八三二）三月十五日に生まれた。小山田家の出身で、佐竹藩主の息子の養育係をしたという話がある。又秋田の生んだ農政の神様と